

「雀鳴子図屏風」の調査

A report of “Sparrow and Naruko screens” (a pair of six folding screens)

■ 阪野 智啓 Tomohiro Banno / 安井 彩子 Ayako Yasui

愛知県立芸術大学 文化財保存修復研究所

Institute for Conservation of Cultural Property, Aichi University of the Arts

はじめに

本稿は平成26年度に修理を行った個人蔵の金箔貼付け六曲一双屏風の調査報告である。本屏風は継ぎ重ねのある金箔や狩野派画風の彩色描法から、17～18世紀頃の制作と推測される。題名は屏風裏や箱に付せられていないが、両隻共通の画題として鳴子の掛けられた田園に遊ぶ多くの雀が描かれていることから、「雀鳴子図屏風」と仮に名付けた。

鳴子と雀のほか、両隻に松、右隻に竹、左隻に梅とめでたい画題が配されており、収穫の豊穰と吉祥を示している。描かれる草花は芙蓉、女郎花、藤袴、菊が並び、秋の景色として彩っている。松にとまる雀には総身が白いものも描かれ、これも吉祥を現すものと考えられる。

背景と鳴子の一部に金箔を貼り、空間には砂子(金の小片)を撒く華麗な仕様であり、堅実な草花の描写と鋭利な岩石の表現は、狩野派に学んだ作者を想像させる。

1. 絵画材料について

1.1. 左隻

【金箔】

金箔3～4号程度の色目で大きさは3寸3分四方、箔足はほぼ横目(左隻第一扇に一か所縦目箔足)で一致しており、下塗りはない。金雲に比べ、切箔・砂子や鳴子に押された箔はわずかに軽い色をしている。

鳴子には黄土、金箔、定色が交互に用いられ、鳴子の内外どちらかに箔があるような仕様となっている。部分的に箔を白色で潰したり、箔下を丹具にするなどして、鳴子ごとに変化をつけている(図1)。

【砂子】

切箔と砂子を併用している。

【彩色】

・笹……黄土地に緑青。
・水流……灰青色の下塗りに鈍い群青(7番程度)で描かれ、藍隈が入る背景(金箔)との境界に胡粉のあたり描きがある。

- ・芙蓉…胡粉地に臘脂の暈し。
- ・青菊…胡粉盛り上げ地に藍、臘脂、藤黄を掛ける。
- ・岩……緑青、黄土地に灰青色が掛かる。
- ・葉……草汁の隅。
- ・松葉…緑青薄塗で括り隈、重なった奥の葉の根元に草汁で暈し。
- ・田圃…薄墨に緑青がかかる。
- ・雀……一般的な茶色毛のほか、真白な雀も描かれる(図2)。

1.2. 右隻(左隻と同じ内容は割愛)

【金箔】

左隻と同様に箔足がほぼ横目に揃っているが、右隻第六扇の箔足は部分的に縦横が乱れている。

【彩色】

- ・砂子…左隻よりも切箔の量が多い
- ・女郎花…丹具地に胡粉で盛り上げ、藤黄をかける
- ・藤袴…群青に臘脂の線描



図1 鳴子



図2 白い雀

2. 近赤外線・近紫外線撮影について

作品全体の近赤外線撮影を行ったところ、目視による材料判定におおよそ沿う結果が得られた。また芙蓉、藤袴は近紫外線撮影も行った。

岩の緑部分(図3)は近赤外線では黒灰色に映るため、目視通り緑青と考えられる。それに対して、灰青色部分は近赤外線では可視光より白く映っているため、群青ではなく、藍などの染料を使用している可能性がある。

芙蓉(図4、5、6)は白地に桃色の暈しで花卉を描いてあり、狩野派画風であることから、この暈し部分は臙脂や蘇芳などの染料であると考えられた。近赤外線では殆ど映らなかった暈し部分が近紫外線では映ったことから、染料で描かれた可能性がより高まる結果となった。



図3 岩(左:可視光撮影、右:近赤外線撮影)



図4 芙蓉(可視光撮影)

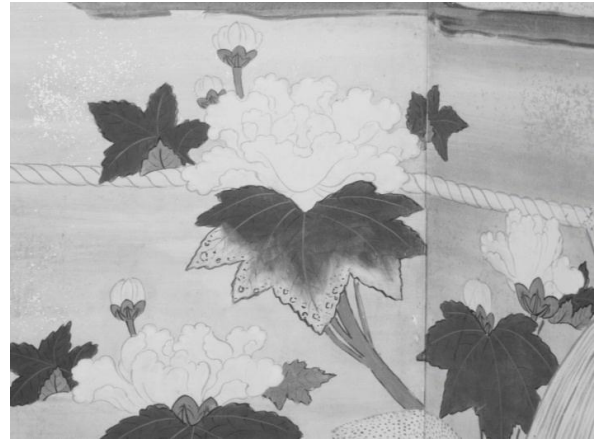


図5 芙蓉(近赤外線撮影)



図6 芙蓉(近紫外線撮影)

おわりに

主題である鳴子は金箔、定色箔、黄土、緑青により多数描かれており、隣り合う鳴子同士の箔色を変えることや、彩色技法に変化を付ける工夫において注目される。

金雲部分は継ぎ重ねた箔足のほとんどが横目になるように押されていたが、通常箔足は縦横不揃いで押されることがほとんどであり、意図的なものを感じる。横に並べることによる金雲表現のひとつも取れる。

彩色に特異な点は見受けられないが、色素が失われやすい臙脂や藍などの有機染料が良く残り、美しい芙蓉をはじめとした当時の染料による描写が見られる点において貴重である。

調査協力

本田光子(本学芸術学専攻講師)

赤外線・紫外線撮影

青木智史(奈良教育大学特任准教授)